

品性論(7)

——廣池千九郎の品性論②——

諏訪内 敬 司

目 次

- | | |
|-----------|--------|
| 一 はじめに | (以下本号) |
| 二 品性 | 最高品性 |
| 三 品性完成 | 品性と人格 |
| 四 最高道德的品性 | まとめ |
| (以上前号) | |

五 最高品性

(一) 最高品性の内容、例

廣池の使用した「最高道德的品性」の類似用語に、「最高品性」がある。最高品性について廣池は、①至誠、慈悲の精神をもつ、②伝統／準伝統を尊重する、③人心の開発救済に心を傾ける、④世界の平和・

人類の幸福を希う、ような最高品性(⑧二二八)とか、神・自然の心に一致する(⑧二七六)と言うだけで、その意味を直接には説明していないように思われる。そこで、「最高品性」とはこれらの記述から推察すると、「最高道徳を実践した、あるいは実践しよう」と志した結果得られた品性」という意味であると考えられる。

(二) 最高品性と最高道徳の関係

まず、功利的でなく純粹な気持ちで、最高品性を造って人心を開発し、(家や国の)親に真に安心を与えたり(⑧四一四)、最高品性と最高理性とをもっていないと、伝統に対する尊敬の觀念が発現しない(⑦三八四)とし、最高品性をもつことが最高道徳実行のための必要条件だとしている。また、モラロジーは、「真の人間の最高品性を完成せしむる学問」(⑧四三六)、「最高道徳とは自己の最高品性を完成する行為を指す」(⑧四〇)、あるいは、モラロジーと最高道徳は最高品性を完成することを目的にする(①七六)、最高道徳は自己の最高品性を形成しようとする動機、目的から出発している(⑦四)、とあるように、最高品性完成が最高道徳の目的とされている。ということは、最高品性を完成するために最高道徳を実行しようとするので、最高道徳を実践した結果最高品性が得られるということではないのではないかと疑問が湧く。

次に、最高道徳にて真に他人から開発救済されたということは、自己の最高品性が完成された(⑧二五一)ことになる。最高道徳はまず自己の最高品性を形造ってそれを団体の精神に移植して最高道徳的に開発救済(⑨二六七)する、とある。ここでは、自分が最高品性を作ってその精神を団体に影響を与えることと、逆に他人から影響されて自分の最高品性が完成することと、両方向からの説明であり、最高道徳の実践によって品性を完成した人が、その品性の力・影響力によって他人を開発救済するという側(A)からの説明か、開発救済される側(B)が影響されて品性を完成して最高道徳を實踐するという説明かなど、視点の違いによって説明の記述が異なっているということであろう。

(三) 最高品性と品性との関係

「人間の最高品性もしくはこれに近似せる人間の品性」(⑨九〇)とあるように、廣池は最高品性と単なる品性とを区別しようとしている。両者の違いは、最高道徳を實行して得られる品性を最高品性と考えていることである。ただし、最高道徳において、「最高品性の完成」が「品性完成」と言い替えられたり(⑧二五一)、「最高品性の完成」が「品性完成」という用語で説明されている(①七六)ように、最高道徳という領域のなかで単に「品性」と表記していても、最高品性の意味で使っていることがあるので、注意が必要である。

(四) 最高品性形成の方法

この説明は二つのタイプに分類できる。一つは、最高道徳の全体的な実行による場合である。すなわち、最高品性は最高道徳を体得し且つ実行することによって出来る(⑧二七六)、神の精神を伝える聖人

の教訓と正統な学問の根底を貫く諸原理を体得し、随順することにより造り出される(⑦一一)、最高徳の体得によってできる(⑨三四八)、それによって具備される(⑨三三八)、最高徳をもって最高品性の人間を造る(①序一二三)、①最高徳を聴く、②人心の開発救済に努力して神聖人、伝統の苦勞を体験することで慈悲心ができ、③自己反省の心ができて真の最高品性ができる(⑨三〇二)、等である。もう一つは、個々の原理の具体的な実行によるという場合である。例えば、伝統尊重の原理を体得して至誠慈悲の精神となり、最高品性を形造る(⑦三三三)、まず自己が開発救済されて最高徳の精神を作り、かつ最高徳を実行して造る(⑧二一六)、等である。

このように、最高品性は、最高徳の一部または全部によって形成されるとする。これらの例では、一つまたは二、三の原理を強調しているが、最高徳の実行は全ての原理を実践して初めて成り立つと考えられるので、本来は全ての原理を実行して初めて最高品性が形成されると解釈すべきであろう。

(四) 最高品性完成の方法

提示されている方法の一つは、神・自然の法則に従うということである。すなわち、神を信じ、神・自然の法則を守り、その範囲内において自力を用いる(⑧四一七)、ということである。但し、自然の法則とは廣池の考えによれば、聖人の示した内容、即ち最高徳なので、それは次の第二の方法と共通している。

第二には、五章(四)項の第一と共通して、最高徳の全原理を実行することによって完成されるとする。

すなわち、自己の不完全な先天的、後天的原因に基づく自己の精神を破棄して、神の本性へ自然の法則に適應するように改心するへ自我没却（自我没却）のような精神を完成することが最高品性の完成(⑦一九二)である、宗教団体幹部が神の慈悲心を体得して完成(①七六)する、神の知識と慈悲を他の人心に扶植して造らしめる(⑧一六四)、伝統に関する一切の原理と法則が、個人の最高品性の真の完成と人類社会の真の完成に到達する原理及び法則である(⑦二七七)、という。その他には、質的量的に他人の欠点を補充し(廣池はこれを最高徳的犠牲に当たるとする)、これを仕遂げる精神作用(＝真の慈悲、贖罪)によって完成する(⑦二二八)、というのもある。

これらを見ると、(四)項の最高品性形成の方法と、(五)項の最高品性完成の方法とは実質的には同じことを表現しているように思われる。要するに、最高徳を実行すれば実行者の最高品性が完成されるとしている(⑦八一九)のである。ただし、完成法には神・自然の法則に従うという項目があるのに対して、形成法ではそれが触れられていない。

ところで、(一)項(二)項、特に(二)項では、先に品性をもって初めて最高徳が実行できるとするのに対して、(四)項(五)項では、最高徳を実行することにより最高品性が結果として完成／形成されるとあり、矛盾した記述であるように思われるが、どう解釈すべきか。

(六) 最高品性の効果／幸福との関係

最高品性の効果との関係については、例えば、自己が神に一致する人間の最高品性を形成すれば社会

に知られる(⑦一七六)、最高品性を用いて、あるいは完成して運命を開拓する(①序九〇)等の記述がある。また、『妙法蓮華經』序品の「己利を逮得す」の説明として、「真に自己を利益する」ものは、学力、知力、金力、権力、等ではなく、最高品性であるとしている(⑧四一一)。

また、最高品性を幸福に結び付ける説明が際立っている。すなわち、最高品性の完成は「具体的幸福の享受の原因となる」(①序一一七)、最高品性を造って自己の幸福を獲得する(⑧一五七)、最高品性を完成すれば、人爵だけでなく健康その他の幸福の要素が自然に実現する(⑦六)、最高品性を所有する所には、名譽、金力、権力、社会的地位だけでなく、人間の力では自由にできない偉大な幸福(健康、長命、子孫永続等)を享受し得る確実な基礎が賦与される(⑦一二)、神の心に一致するような高い品性をもてば、名譽、利益、財産、社会の高い地位、成功を獲得できる(⑨二九九)、最高品性を完成して精神的苦悩を断除できれば健康、長命、開運、一家和合、子孫繁栄等の具体的幸福の基礎が確立される見込みが立ち、真に安心立命を得られる(⑧四一一)、最高道徳を実行すれば最高品性が完成しあらゆる永久の幸福に到達する(⑦八)、人間の品性の上に立脚した努力によって社会的名譽、實質的幸福が得られる(⑨九〇)、等である。

以上のように考察して来ると、最高品性完成の効果は、最高道徳実行の効果と同じであると見てよいであろう。

(七) 最高道徳的品性と最高品性との関係

「最高品性」の内容や例を見ると、最高品性とは「最高道徳的な精神をもった状態」と言えるので、それは「最高道徳的品性」と同じことを示していると言えるのではないか。形成法から言っても、両者とも最高道徳を実行することによって達成される、または得られるということである。従って、方法論から見る限り、最高品性完成／形成法は最高道徳的品性の形成／完成法と同じなので、實質的には最高品性と最高道徳的品性は同じと見てよいのではないか。両者は明確には区別されていないようである。

ただし、廣池は最高品性の英文を Highest Character と表記している(『基礎的重要書類』六五)。なぜ最高道徳の英文表記 Suprem Morality に倣って Suprem Character としなかったのかの疑問が残る。

最高道徳的品性の効果／幸福との関係と最高品性の効果／幸福との関係についても同じことが言える。ただし、最高道徳的品性の説明に比べると、最高品性の方が形成法にしても効果／幸福との関係にしても、記述が多くまた詳しくなっている、ということは指摘できる。即ち、最高道徳的品性の効果は余り述べられていないのに比べると、最高品性を完成して健康、長命、子孫繁栄、名譽、財産、地位等の幸福獲得の条件が得られると強調されていることが目立つが、その理由は筆者には不明である。

高い品性を表すものとして最高道徳的品性と最高品性という二つの用語があるが、それらは明確に使い分けているわけではないのではないか。後者は「道徳的」を省略しているにすぎないのかどうか、その意図を探る糸口は見つからない。あるいは、神に近い、最高道徳実行の結果得られる品性という意味で「最高品性」と言っているのか、その使い分けの意図は不明である。

六 品性と人格

人間の道徳性を示す言葉として「品性」という用語を使う廣池ではあるが、品性に関連する「人格」という表現も取り入れているので、次に、品性と人格との関係について見ておこう。「人格」は「論文」でも用いられているが、昭和三年の同書出版以降特に頻繁に見られる用語である。ただし、廣池は、品性と同様に人格についても明確に定義しているわけではない。⁴⁾

(一) 人格の説明

1 人格Ⅱ知情意をもつ人間の精神面の全体

まず、「品性」には言及せずに、人間の精神面を便宜的に区別する知情意全体から人格を説明するものがある。「完全なる知・情・意を具備する人格の観念」(『論文』⑨六三)、「いわゆる人格は、単に知識をもつて認識するところの真理の範囲を超越して、知のほかに情・意を具有するものであります」(『論文』⑨三三一)、「人間の人格の内容を智、情、意の三つであると云ふ事に心づかず……」(『特質』一九八)、「凡そ人間とか箇性とか箇人とか申します時には、只其人間の智識方面だけを指すのでなくして、必ず智、情、意の三つを具したる或る人間の全體を指すのであります。之をパーソナリティ(Personality)即ち人格と称するので御座ります」(『特質』一九七)、等である。

2 人格Ⅱ道徳的精神と道徳的精神作用

次に、「品性」にも知情意にも触れず、人間の精神面を「人格」としている記述がある。「人格とはすなわち人間の精神を指すのであります」(『論文』⑧三二二)、「いわゆる人格は人間の道徳的精神及び道徳的精神作用と同一であるのです」(『論文』⑧三二二)、等である。⁵⁾

3 人格は人間構成の一要素

「人間と称するものは、この人格と肉体との二つを具有するものであります」(『論文』⑨三二三)とあり、これは、人間の構成要素を一般的に精神と肉体に分ければ、精神面を人格と見れるということであるが、実質的には、前の2節に入れられるものである。⁶⁾

(二) 品性と人格の関係

1 品性と人格を同一視

両者を同じものと見なす表現として、「道徳もしくは信仰は人間の品性すなわち全人格の表現でありま

す」(『論文』⑧二二四。傍線は引用者。以下同様)、「其人(引用者注…被使用人)の品性即ち人格は単に主人側に認められるのみならず……」(『重要注意』一四頁)、「其人々(引用者注…富豪、資本家等)の威力は其人々の最高品性即ち最高人格の力でなく、只其人々の金力が其部下若しくは一般社会の人心を支配して居る」(『重要注意』十一頁)、等がある。

先に品性を使い、次に「即ち」と述べて人格で置き換えている。これらを見る限り、廣池は両者を同一であると考えていると考えられなくもないが、後述の六章(二)項4節に示すように、人格の方が品性よりも広い意味をもつ言葉として用いているので、「品性即ち人格」というのは、「品性即ち人格の中心」ということを省略して用いていると解するべきものであろう。

2 併記

『論文』出版(昭和三年)以降の出版物に両者が併記される例はかなり見られる。

①品性と人格

まず、「品性」「人格」と、形容する語句が何もつかない例がある。すなわち、「モラロジーでは……聖人の教に本づき他人に対しては如何なる人、如何なる場合にも慈悲寛大の精神を以て自己反省を行ひ、其相手方の品性(キャラクター)及び人格(パーソナリティ)に対してそれ相応の待遇を為すのであります」(『特質』九五―六)、「真の人間と申すは品性と人格とを具へたるものを申すので、肉体は只其品性、人格の容器であるだけのものです」(『内容の概略』五一)、「聖人正統の教により人心開発をすれば、だんだんに天爵が出来、其品性(キャラクター)と人格(パーソナリティ)とが高く為り、其結果が……所謂高き人爵を得て進化する事に為る」(『内容の概略』三六)、「義務の先行及び累積は人間の品性併に人格の原因を為す事を証明す」(『内容の概略』十八)、「大義名分の教育の如き偉大なる事業を完成せむとするに当りて、人間の全品性並に全人格を完成する事なくして……」(『大義名分の教育』二二)等

ある。以上で見える限り、併記されているということは両者は基本的には同一ということではなく、別物であると考えることができる。

②最高品性と最高人格

次に、品性・人格の他に、以下に見るように、「最高」品性・「最高」人格と、「最高」という語句がついているものがあるが、ついているものついていないものとの間に違いはあるのか。基本的には、両者とも最高道德を實行した結果得られるもの、ということであろう。なお、「最高道德的品性」とは表現しても、「最高道德的人格」とは表現していないが、その理由も不明である。

「各個人が今一段進歩發展せむとするには先ず自由な立場にある個性によりて最高道德を受け容れて其精神を最高道德に更生させ以て最高品性と最高人格とを造り」(『内容の概略』五三)、「当専攻塾に入塾せる塾生諸氏は其智徳の程度に差ありとするも皆各々最高品性と最高人格とを具する所の独立の人」(『基礎的重要書類』八九)、「道德科学研究所と道德科学教育」二六)、「聖人正統の教育は必ず其最高品性及び最高人格を以て自己の安心、平和及び幸福を實現せしめ、其結果として国家及び社会を守り益する」(『道德科学研究所と道德科学教育』二八―九)、「道德科学の實質並に内容は聖人正統の最高道德にして、……天地の公法即ち人類進化の大法則に一致して居れば、人間の最高品性、最高人格を完成して餘りある程の道德的威力を有して居る」(『大義名分の教育』二五)、「人間の全最高品性並に全最高人格を完成する事を目的と為し」(『傳統尊重の教育即ち大義名分の教育を、此人間の最高品性並に最高人格涵養の基礎の上に置く』(『大義名分の教育』二五)、等である。

なお、最高品性と最高人格との違いは、品性と人格との違いと同質と見てよいであろう。

3 別物

「人格の実質たる品性」(『論文』⑨三三三)、「最高の品性を造らしめ、もってこれに相当するところの人格を完成せしめんとするもの」(『論文』⑧一六四―五)、「先天の徳を有し、且つ相当の品性を有する人が、その最高道德の実行者に接触したならば、必ずその人格の尋常人と異なることを発見する」(⑨三四八)のように、実質的に両者を別物として扱っている箇所がある。両者がどう違うかは次の4節で説明できる。

4 人格Ⅱ品性+学力、智力、学問、才能、知識、財産、健康、長命、権利、地位等

品性と人格は全く同一ではなく、「品性」を中心にして、更に別の要素が加わって初めて「人格」となるという説明である。つまり、人格は品性の他に、精神活動の結果として得られるもの(智力、学問、才能、知識、等)も含んでいるという考え方である。ただ、筆者の見る限り、それは以下に示すように、『論文』では説明されず、『論文』出版以降の出版物にのみ散見されるので、『論文』出版以降考えが徐々に固まって行ったということではないかと思われる。

「法律上にて所謂人格(Personality)はすべて智徳の外、其人の権力及び社会の地位を含むが故に品性と人格とは厳密に云へば同一物ではないのです」(『基礎的重要書類』六五)、『道徳科学研究所と道徳科学教育』二、「完全なる人格(パーソナリティはキャラクターの外に学問、知識、財産、権利等を包括する謂なり)ができる」(『基礎的重要書類』二〇)、「法律上の権利の基礎となる所の人格は品性・知識・才能・手腕・健康・長命・財力・権力・社会の地位などを含む」(『大義名分の教育』一七)、「人間の眞價は其人の道徳実行の結果より得たる品性と之に学力、智力、其他いろいろの物を加へて出来た所の人格とに存するのであります」(『内容の概略』五一)、「全最高品性に学力、知力、権力、財力等を加へたのが、人間の全最高人格であるのです」(『大義名分の教育』三七)、等である。なお、「人格」とは学力、智力、才能、財産及び社会の地位をも含む」(『基礎的重要書類』五一)というのがあるが、他の引用文から推察して、この文章には「品性の他に」という語句が省略されていると解釈すべきである。

以上のように、「人格Ⅱ品性+学力・知力・権力・財力等」となっており、人格はより広い概念として、単なる道徳面だけではなく、品性・道徳は中心になっているもの、その他の人間の精神面及びその活動の結果得られたものの側面をも含めた人間全体を表す総合的な概念として使っていると言える。この用法が、人格について最も包括的なものであるように思われる。

③ 人格の形成法

品性にあるものがプラスされて人格になるというが、では、人格はどういう過程・工程を経て造られるかが、次に問題となろう。

1 最高道德の実行により品性が作られ、その品性がもととなって人格を造る

「この（引用者注…無我すなわち慈悲）高尚且つ純潔無比の精神がその人の品性となりて人格を形造る」（『論文』⑧二二四）、「モラロジイの実質を形造るところの最高道徳による最高品性は法律上にて最高の人格を獲得し、かくのごとくにして獲得したところの人格はすなわちいわゆる天爵の原因であります」（『論文』⑧四三六）。これらは、以下にあるように、『論文』出版以降にも見られ、最高道徳実行によりまず品性が先に出来、次に人間の精神面の全体である人格が形造られる、という説明である。すなわち、「人間の道徳的精神が其高きキャラクター（Character）即ち高き品性を造り、其高き品性が個人の高きパーソナリティ（Personality）即ち人格を造り、其善良なる各人が相集つて社会を構成致し、而して始めて我々に安心と幸福とが得らるゝのであります」（『特質』一三四）、「正統の学問は聖人の教に従うて来るものをば一人づゝ之を開発して之に最高品性を造らせて、所謂天爵を得させ斯くの如くにして先づ個人の人格を建設し、次に之を団体の教育に及ぼし、漸次に国家及び社会を新たにしようとするのであります」（『特質』二四八）、「必ずモラロジイに所謂最高道徳の実行を為す事によりてのみ其神意に一致する智徳一体、情理円満の品性（キャラクター）を造り得て遂に最高の人格（パーソナリティ）を完成し得るに至るものと為つて居る」（『基礎的重要書類』五一）、「当研究所並に専攻塾は……知徳一体の聖人正統の教育（the Orthodox Education）を施し以て学生の最高品性（Highest Character）を陶冶養成し而して其最高人格（Highest Personality）の獲得に資せむとするものである」（『基礎的重要書類』六五）、等である。残念ながら、品性がどういふプロセスを経て人格となるか、必ずしも明確ではないように筆者には思われる。

2 品性が人格を発生させ、さらにその結果、（法律上の）権利を生む
前半は前節と共通しているが、後半に、人格が元になって権利の発生にまで及ぶと述べた例である。前節はその後半部分を省略しているのであろう。

「品性と人格とが本に為つて、権利、利益其他のものが出来て来るので、結局各自の運命もさう云う順序によりて出来るのであります」（『内容の概略』五一—二）、「個人の義務先行の行為即ち品性の完成は、法律上に於ける人格即ちパーソナリティ（Personality）の発生の原因と為り、個人の法律上に於ける人格の完成は個人の法律上に於ける権利即ちライツ（Rights）を発生させる原因と為るので御座ります」（『特質』二〇四）、「義務先行が人間の品性を高め、品性の累積は人格を高め、人格の累積は眞の正しき権利を生み……人間社会に自然の階級を生み出す」（『大義名分の教育』一七）、「各人の最高道徳による義務先行が各人の最高品性（ハイエスト・キャラクター Highest Character）を形造り其人の最高品性は其人の高き人格（パーソナリティ Personality）を形造るものであるが、すべて其人の人格の程度によりて其人の権利の程度、分量が定まると云ふのである」（『国民精神総動員と最高道徳』一一）、「万一此真理（引用者注…どんな悪人も聖人に対して聖人の最高品性が全人類の精神を照らしてその精神を支配しているということ）を排斥、反対できないということ）を御了解に相成りまして、モラロジイを御研究に相成り最高道徳を体得して最高品性を造り以て最高人格を御完成下されたならば、あなた方（引用者注…政治家、貴族、富豪等）は忽ちあなた方の御人格そのものに支配権が出来ます」（『重要注意』一

三)、等である。

3 精神作用と行動(最高道德実行)

「品性」に言及せずに、最高道德の各原理の実行により(本来的には全ての原理)人格及び権利を造るという説明がある。他の箇所から推測すれば、恐らく「最高道德を実行して品性が高まり、それが元になって、人格及び権利を生む」という点を省略しているのであろう。具体例は以下の通りである。

「人間的知識の開発のみには、真に人間としての人格を形造らすることは出来ませぬ。必ずや聖人の教えによりて神の光明をその精神に与えねばならぬのであります」(『論文』⑦三七八)、「個人の人格及び権利を形造るものは、その個人自体の先天的素質及び後天的における精神作用及び行動であるとなっておるのであります」(『論文』⑦一三八)、「義務先行の一面の原理より推考すれば、義務の質と、量と、その実行期間の継続の長短とは、人間の人格及び権利の等級を定むる標準となるのであります」(『論文』⑦一六七)、「自我を没却するも自己の既得の自由及び権利を失うことはないのみならず、これがために人格を高めし結果は、未来においてかえって他の人より更に大なる自由と権利とを獲得することを得るに至る」(『論文』⑦一九八)、等である。

4 最高道德と人格との関係…人心開発救済によって全人格を(根本的に)改造する

廣池は「従来の宗教団体にて行うところの直覚的信仰の力にては、右のごとき人間の全人格の根本的改造は出来ぬのであります」(『論文』⑧一九四)という立場に立ち、必ず最高道德の人心開発救済を必要とする、と説く。即ち、「人心救済は、人間の全人格を改造して、……その善人をばますます善人に、富人をばますます富むようにする」(『論文』⑧二六〇)、「真に救われたという人は、……全人格の根本的改造を経たる人を指すので、従来の道德や信仰にて、一、二の善事をなす人というごときものを指すのではないのであります」(『論文』⑧二四一)、「最高道德にて真に救済された人というは、……その改心は人間の全人格の変化を意味しておる」(『論文』⑧二二九)、等である。

ここで用いられている「改造」「造り変える」の意味は、利己的人間から最高道德的人間に変わるといふことであらう。

「品性」の(根本的)改造は二章(+)項で述べたが、それは最高道德を実行することにより普通道德的品性を最高道德的品性に高めることを意味していると思われる。廣池が「全人格の根本的改造」という用語を用いたのは、最高道德の実行によって最高道德的人間になったということを表現したかったからではないか。品性だけではなく、人格の根本的改造についても触れたのは、品性は道德の中心であるのに対して、「人格」は人間の精神面全体を指すからではないか、というのが筆者の解釈である。

廣池は、最高道德は人間が自然の法則に従うことによりその人を最高道德的人間に変え、その結果、その人は根本的に改まるとし、中でも特に人心救済の原理を強調している。

なお、廣池は、宗教によってではなく、最高道德によって真に救済されることにより、全人格の根本的改造が行われるとしている。その理由は稿を改めて考えてみたい。

(四) 人格の特徴

1 独立、自由の人格

「モラロジ―に於きましては伝統の原理を発見致しまして人間をして真に独立、自由の人格を完成せしむる方法を確定する事が出来ました」(『特質』二二五)、あるいは、「此の伝統の原理が其精神に入つて居らぬ人間では其人は個人としては借財を負うて居る日陰者であるので、一人前の独立、自由の人格たる資格を有しない賤劣者であります」(『特質』二二七)、と言ひ、特に伝統の原理の実行が独立、自由の人格をもたらすとしている。伝統への感謝報恩をすることによって初めて負債・借財が帳消しになり、独立、自由の身となる、という考えである。つまり、ここでの「人格」は、人間全体という意味で使われている。独立、自由の「品性」と表現しないのは、品性が人格よりも狭い概念であるからではないか。

2 情理円満の人格

「従来の教育にては智若しくは情に偏する人間を造り出して完全なる情理円満の人格を持つ人間を造り出し得なかつた」(『内容の概略』四一及び『道徳科学研究所と道徳科学教育』六)で言う「情理円満の人格」とは、精神面が知情意のバランスが取れたという意味ではないか。「モラロジ―に所謂最高道徳の実行を為す事によりてのみ其神意に一致する智徳一体、情理円満の品性(キャラクター)を造り得て……」(『基礎的重要書類』五十一)で言う智徳一体、情理円満の品性との違いは何か。この点も疑問として残る。

3 中正、周到、円満なる人格

情理円満に似た表現として、「モラロジ―教育は……中正、周到、円満なる大人格を造るを以て教育の目的と為して居る」(『道徳科学研究所と道徳科学教育』三二四、『基礎的重要書類』六七)というのがあつた。ここでも、人間の精神面を人格と表現しているように思われる。

以上、1節、2節、3節共に『論文』出版以降に用いられている表現である。その理由は、①廣池自身、「品性」よりも広い概念である「人格」を用いるようになった、②日本社会では昭和時代に入り、「品性」よりも「人格」がより使用されるようになったという時代背景があつたのではないか。

(五) 人格向上の効果

人格が高まると、幸福や道徳的権利と結び付くという説明となり、それは品性の効果と同じである。なお、廣池は人格の「完成」とは言わずに、人格の「改造」と表現することが多い。唯一の例外は、「個人の義務先行の行為即ち品性の完成は、法律上に於ける人格即ちパーソナリティ(Personality)の発生の原因と為り、個人の法律上に於ける人格の完成は個人の法律上に於ける権利即ちライト(Right)を発生させる原因と為るので御座ります」(『特質』二〇四)、である。

1 品性が完成すると人格が高まり、権利が与えられ、その結果、生存、発達、安心、幸福、自由、

権利、健康、長命、子孫繁栄等がもたらされる

「人間の生存・発達及び幸福の基礎はその人格及び権利の程度に依じて定まるものであるのです」(『論文』⑦一三二)、「自我を没却して、自然の法則に従うた人がかえって偉大なる人格者となり、また偉大なる権利を与えられ、且つその子孫あるものは、それが万世一系に永続しておるのであります」(『論文』⑦一九七)、「聖人はあらゆる人間の階級に対して、みな斉しく神の意思を体得し、人間としての各自の人格を造り、もって各自の自由・健康・寿命及び幸福を全うさせようとする」(『論文』③三五四)ということである。なお、他の箇所から類推して、これらはいずれも「品性を完成した結果」という語句を省いていると考えられる。

「人間の道徳的精神が其高きキャラクター(Character)即ち高き品性を造り、其高き品性が個人の高きパーソナリティ(Personality)即ち人格を造り、其善良なる各人格が相集って社会を構成致し、而して始めて我々に安心と幸福とが得らるゝのであります」(『特質』一三四)。これは、「品性が向上した／完成した結果」という語句を省かない、数少ない例である。

2 人格の力が他人に道徳・信仰を實行させる

「その(引用者注)真理を實現した聖人、準聖人、その他の道徳家の)人格の力が一般人間の道徳及び信仰を支配する……故に人間の道徳及び信仰を實現させる動力は、真理のみにては不十分であって、必ず人格の力を要する」(『論文』⑨三三一)とする。つまり、理論の力よりも、人間性や人柄による影響

が道徳や宗教の實踐に有効であるということである。人格の力はどんな相手にも好影響を与えるということである。それが高ければ、「たとい相手方が不正であっても、わが精神に自我を没却して慈悲の心になることは毫も損害を蒙ることはないのみならず、かえって自己の高き人格はその不正の相手方もしくは一般社会を感動させて、自己の自由と権利とはかかる場合においてもますます増加するのみ」(『論文』⑦一九八)ということになる。これらは、(六)項での「人格の感化」「人格教育」という表現に直結するものである。

これらの具体例として廣池は、(道徳の教師である)川合氏の人格崇高であったことが、那是製糸社長波多野氏や幹部が川合氏を尊敬し、同社の繁栄継続の原因であるが、知識階級の波多野氏の人格の力が那是の隆盛を生み出したことは疑いない(『論文』⑦三六六―七)と指摘している。

(六) 人格感化による教育

1 最高道徳の教育法

廣池は、「最高道徳の教育法は主として人格の直接感化を必要とする」(『論文』⑨二九五―六)と、人格の影響が他人を動かす、とりわけ最高道徳においては、最高道徳実践に導くのは人格の感化を必要とすると強調している。それは、(五)項2節で述べたように、人格の力が大きいからであろう。しかも、「ただしかしながら、偉大なる人格者の感化力は尋常人の感化力と異なる故に、必ずしも直接の接触を要せぬのであります」(『論文』⑨二九六)と言う。すなわち、直接会ったり指導を受けなくても、書いたも

の／記録等を通してでも可能なほど力があるということである。これは、経験してみないと実感できないことであろう。

なお、廣池は用語として、「品性の感化」、「品性者」、「品性教育」等と表現しないが、それは、廣池は品性を強調しながら、人格感化、人格教育、人格者という表現は一般に使われていたので、慣例に従ったのであろうか。

2 人格教育

「世界諸聖人の教説、教訓及び其実行に一貫せる所の学問、知識及び道德に本づく純粹正統の知徳一体の人格教育を受くる事は、……其（引用者注・中等教育以上の修了者）最高品性を完成するに必要な条件なりとす」（『基礎的重要書類』六七、『道德科学研究所と道德科学教育』四）とあるように、最高道徳では人格教育を重視する。人格教育とは、すぐれた人格をもつ者に接触することにより人間の精神面全体から生徒に好感化・影響を与える教育である。

具体例として、「晚餐には人格教育の一助として講師、学生食卓を共にする事あるべし」（『基礎的重要書類』六）と、食事を共にすることを重視している。

(七) 人格の尊重

一般に、「人格の尊重」は用いられている表現だが、「品性尊重」とは言わない。廣池もそれに倣って、「品性尊重」を用いなかったのか。

1 伝統に対して

まず、伝統・準伝統に対して、その人格を尊重することを求めている。すなわち、「故に最高道徳は、真理を尊ぶと同時に、その生きたる精神的伝統の人格を尊び、理解と感激と、正当なる判断とによって、その慈悲心を涵養し、且つこれを發揮する」（『論文』⑨三三三）、「万一、人間にして服従心を失い、自己の上に立つ人に対し、もしくは下に立つ人に対してその相手の人格を尊重する精神なく、且つその伝統もしくは準伝統に対して服従の義務なしといふとき精神あらば、その人の精神は全く孤立的である」（『論文』⑦四〇四）、「下のものもまた傲慢にして〈割り注略〉その社会における高き階級にある人々の人格を尊重せず、且つ上のものの好意をも察せず、その心僻みて常に上のもの意思に反抗する傾向があるのです」（『論文』⑧二四八）、等である。

2 開発救済の対象に対して

次に、廣池は、開発救済の働きかけはしても、相手が最高道徳を志すか否かの最後の所は、開発救済相手の人格を尊重し、強制はしないと強調する。すなわち、「最高道徳においては、その人の自我を没却させて新たに神もしくは聖人の心を体得することを要求すれど、その被救済者の新人格に対しては極めて深き尊敬を払い、その新人格に基づきて行動するところのその人の功績をば、必ずこれを認めこれを

尊重する」(『論文』⑦二〇四)のである。相手の人間全体、意志、自由、自主性、主体性を尊重し、相手に任ず。決して強制はしない。強制ではなく自由と主体性を強調しているが、選ばない自由がありながらあえて選ぶところに尊さがある、とも言える。

3 一般の人に対して

さらに、不特定多数の人に対しても、「最高道德にて救われた人は、社会一般のこと……等のごとき事業に対して、至誠をもってその発展を祈り、且つこれを助くるのであります。その結果、他人の人格を尊重すると同時に、すべての物質をも併せ尊ぶのであります」(『論文』⑧三三四)、「かの物質を尊重することは人間固有の本能であり、人間の人格を尊重することは聖人の教えたる最高道德であるのです」(『論文』⑨二二)、「最高道德においては、相互にその人格を尊重して、売る者は買う者を欺かず、代価を精確にし、且つ及ぶだけその代価を低廉にするのであります」(『論文』⑨三五九)、としている。

以上のように廣池は、人格の尊重は最高道德であるとまで述べている。同時に、人間の力による教育・導き／開発・救済の限界をも念頭に置いている、と思われる。

(ハ) 神の人格性

人格についても一つ触れるべきことは、最高道德における神の人格性についてである。「最高道德においては、単に宇宙の本体を認むるのみならず、更にその神を人格的に見る」(『論文』⑦三三五)とあ

るように、廣池は人間の人格面だけでなく、神を人間と同じように人格をもつものとする。それは、人間の力の限界から、神を人間という眼鏡を通してしか見ることができない、とらえられないので、神を人間に準じて精神をもち、人間のように知情意をもつものとしてとらえようという、いわゆる「人格神」という考え方である。神は人間には想像もつかないものであり、人間には人間の力の及ぶ範囲でとらえるしか無理である。そこで、廣池にあつては、神を人格的にとらえるという考え方をしている。

その他に、人格神、神の人格性について触れている箇所を探すと、「神を認むることは、必然的に私どもの道徳的活動すなわち全人格の活動を予想するのでありますから、知・情・意を具備するところの人格の対象としては、これを人格的なものと見なければ、いかなる意味の神もその真相が把握されない」(『論文』⑦三三六―七)、「ある一個の心を救済するに当たりては、ある人格的对象(神)に向かつて価を出すのであります」(『論文』⑧二六四)、「私は……かかる(引用者注・生死の間を彷徨した)場合、一面には、自己の精神及び自己の過去における道徳行為の結果に信頼すると同時に、他面、神の生ける人格に信頼して、もって安心を得、かくて今日あるを致しておるのであります」(『論文』⑦三三八)、「理論上からも實際上からも神様をば人格を具せる絶対のものと見るのが科学的に於ける見方である」(『特質』一九八)、「神に対する信仰は此全人格の傾倒でありますから、知識一方から見た人道とか人間の心そのものとかを神として認むると云ふ説は、真に人間の信仰の対象としては不具的なものであります」(『特質』一九七)、等がある。哲学上、宗教学上の人格神の説明とほぼ同じ見解に立っていると見ることが出来る。

七 まとめ

(一) 品性、最高道徳的品性、最高品性

以上、廣池における「品性」、「最高道徳的品性」、「最高品性」及びそれに関連する諸事項について検討してきた。これらの用語の違いの説明は見当たらないが、ほぼ同じものを指す場合と、別のものを指す場合がある。しかし、これらを分ける基準が明瞭に示されているとはいえない傾向がある。

廣池を品性論の系譜のなかに位置付けるとすれば、品性を道徳性とみており、道徳実践段階で意志を重視している点では、近世最大の哲学者I・カントや教育学の科学化を目指した近代ドイツの哲学者F・ヘルバルトに共通する面をもっている。しかし、廣池はカントやヘルバルトの思想を受け継いだわけではないように思われる。廣池は明治十八年から二十五年に歴史家を志して上洛するまで、郷里大分県中津で小学校の教師をしていたが、当時はまだヘルバルト教育学は普及していなかった。大正元年(一九一二)から同四年まで私立中学の校長を務めたが、この時は既にヘルバルト教育学は廃れていた。^⑨廣池が「品性」という用語に親しんだのは、特にスマイルズの『自助論』の影響が大きいように思われる。廣池が同書を好んだのには、その経歴に理由があると思われる。^⑩

だが、スマイルズは品性(Character)について明確に定義しているわけではなく、それがいかに重要であるかを強調しただけであった。廣池もスマイルズの影響を受けてか、品性を強調するものの、また、廣池が『論文』を執筆した大正年間には、品性という用語はかなりの程度日本社会に定着していたので、^⑪

それについての明確な定義や説明は必要ないと考えたのか、そのまま使用した傾向があったと言える。

以下に、廣池の品性観についての筆者の感ずる主な疑問点をまとめておこう。

(1) 品性を「完成する」、「形成する」、「造る」、「形造る」、「高める」の内容に違いはあるのか。造る→高める↓最後に完成するの過程があると言えるか。

(2) 完成と言う場合、どのレベルになったら完成の域に達するのか。

(3) 完成の方法は最高道徳の精神を理解し、それを実行することとあるが、それぞれの箇所では部分的な説明であることが多くある。それぞれが一局面を示しているのに、全てであるかのように説く傾向があるので、読む際には注意が必要ではないか。

(4) 結果を期待しないで品性完成をめざすことと、品性完成の効果を強調することとの整合性があると言えるのだろうか。

(5) 最高道徳の一つまたは二、三の原理の実行で品性や最高品性が完成するという場合と、全ての原理を実行して完成するとある場合がある。全ての原理の実行でないとそれらは完成しないというのが基本であろうが、あるいは一つを完全に実行できるということは、同時に他の原理も完全に実行していることになるのであろう。従って、一つの原理の完全な実行は、同時に他の原理をも実行することになり、品性の完成につながるということであろうか。

(6) 基本的用語の使用が統一されていない傾向がある。整理途上であったということであろうか。

(二) 品性と人格

品性と人格が併記されている場合もあるが、両者は異なるものとして扱っている。その違いは、品性が基になって人格が形成される、というものである。質の高い道徳を実行すると品性は高まり、さらに人格が高まって、それが道徳的権利を発生させ、天爵（幸福）が得られる、という図式である。廣池にあっては、品性よりも人格の方がより広い概念ではないか。また、『論文』出版以降、晩年に至るに従って人格という、より広い概念を使う頻度が高くなっている。

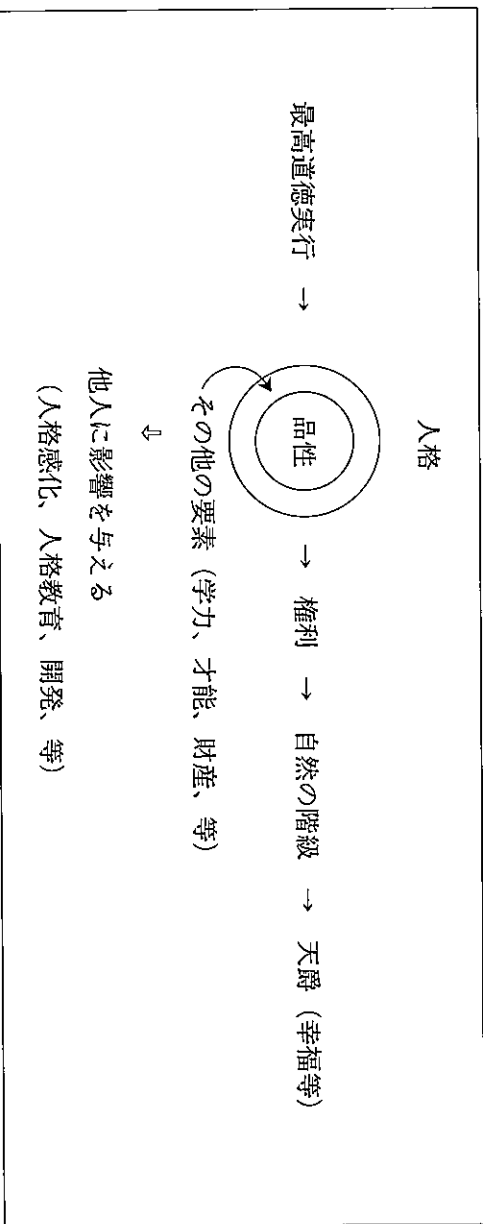


図 <品性と人格の関係及び最高道徳実行の効果>

<注>

- (1) なお、宗教を道徳的角度から捉えようとする廣池は、「釈迦の教説の真髓は人間の最高品性完成のためと人心の開發（救済を含む）」とあり（⑤一九六）と見るところに、その特徴がある。
- (2) 己利については、聖人のいわゆる利己主義（己利）は最高道徳によって自己の最高品性を完成することであり、この自己の品性完成のほかに、自己の真の利益となるものはない（⑤三三〇）と、品性が完成すれば自己の真の利益となるとしている。このように、功利性という点を己利という概念によって克服しようとしていることは伺える。谷口茂「動機論の克服」という視点から見た因果律の原理」『モラロジー研究』9号、一九八〇年、参照。
- (3) なお、菩薩の説明で廣池は、仏の最高道徳では、最高品性は真の永遠の幸福を生み出すと称賛していると解説している（⑤三三二）。
- (4) 日本では、明治時代中頃から倫理学界を中心に「人格」という用語が使われ始め、大正時代には阿部次郎らによる人格主義の普及もあって、「人格」もかなり定着していた。佐古純一郎「近代日本思想史における人格観念の成立」朝文社、一九九五年、参照。
- (5) この他に、最高道徳の品性の本質は人間の精神の実現である、人間とは其人のソール即ち魂、またはスピリット即ち精神を指す、したがって、ローマの二二銅表以来、どの国でも法律上の人格は人間の形態ではなく精神を標準としてある（「特質」一四五―一六）、という説明がある。
- (6) 「人間の名誉及び生命すなわち人格をば、それ（引用者注：金銭、物質、権力、礼儀）以上に尊重いたします」（『論文』⑧三二二）はあてはまらないのではないかと。
- (7) 併記ではなく単独の「最高道徳的品性」という用い方は前号で論じた。
- (8) 会食はモラロジー団体では、行事等で伝統的に行われている。
- (9) 拙稿「品性論(1)——近代日本における出発と展開——」『モラロジー研究』30号、一九九〇年、参照。
- (10) 廣池はそもそも、師範学校の入学試験に二度失敗して、師範学校卒業の学力認定試験によってようやく教師の資格を得て小学校の教師になった。正式な学校教師としては、小学校と、福沢諭吉が郷里の中津に弟子の小幡篤次郎に設置させた中津市校（編入して卒業）を出ただけであった。教師を経て歴史家となって京都

で歴史雑誌を発行して生計を立てていた折り、国学者の井上頼國に実力を認められて日本で最初の古事の百科事典ともいえる『古事類苑』の編纂委員に抜擢された。その原稿を執筆する傍ら古代中国の法制史研究と中国語文法の研究に打ち込み、その業績が早稲田大学の大隈重信総長に認められて同大学の校外講師に任じられた(後に専任講師)。その後神宮皇学館教授に転任して間もなく、『支那古代親族法の研究』によつて東京帝国大学の審査を経て、小学校しか出ていない廣池に、全く異例のこととして法学博士の学位が授与されることになった。しかし、そのときは既に生死の境を彷徨するほど身体が蝕まれており、人間には単なる学問よりも道徳が必要だとして、道徳奨励に身を挺する決心をして天理教育顧問及び天理中学校長になったのであった。しかし、考え方の違いから、教団側の一部と意見の対立が起こって辞任し、病弱の身体を押して講演活動をする傍ら道徳学の研究に打ち込んだ。こうした一〇数年して完成したのが、『道徳科学の論文』であるが、この波瀾万丈の生涯に、廣池が愛読して力を奮い立たせた一つがスマイルスの『自助論』であった。

(11) 前出拙稿参照。

《引用文献》

- 『論文』…『道徳科学の論文』道徳科学研究所、昭和三年、第一版、昭和九年、新版、広池学園出版部、昭和六十一年。
『特質』…『新科学モラロヂー及び最高道徳の特質』道徳科学研究所、昭和五年。
『重要注意』…『新科学モラロヂー及び最高道徳に関する重要注意』道徳科学研究所、昭和六年。
『道徳科学研究所と道徳科学教育』道徳科学研究所、昭和九年。
『基礎的重要書類』…『モラロヂー教育に関する基礎的重要書類』道徳科学研究所、昭和十一年。
『内容の概略』…『道徳科学及び最高道徳の実質併に内容の概略』道徳科学研究所、昭和十二年。
『大義名分の教育』道徳科学研究所、昭和十二年。
『国民精神総動員と最高道徳』道徳科学研究所、昭和十三年。